

時津町は「家読」を推進しています

# たまには テレビをけして

(高学年) 2022年 春号



発行：時津町立時津図書館



## 「すてきなテーブル」

ピーター・レイノルズ/作 島津 やよい/訳  
(新評論)

写真立てにはなつかしいテーブル。かつては、家族みんなでこのテーブルを囲んでいたのに、今はそれぞれの場所で別々のことをしている。誰も座らなくなったテーブルはだんだん小さくなって、とうとう消えてなくなった。ヴァイオレットは再び家族をテーブルに集めようとステキなことを思いついた！

## 家読とは

家族みんなで好きな本を読んで、読んだ本について話す。これが「うちどく(家読)」です。難しいルールは要りません。

家族みんなでルールを決めてはじめてみましょう。

家族で同じ本を読みあったり、おとうさんやおかあさんに読み聞かせをしたりと楽しい時間を過ごしましょう。

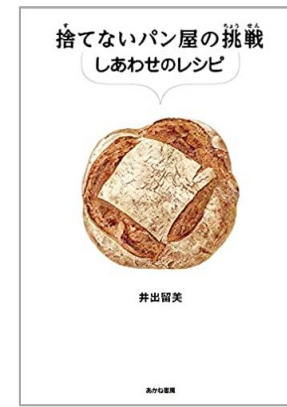


## 「ハルの日」

渡辺 眞子/文 どい かや/絵  
(復刊ドットコム)

ぼくは犬のハル。箱の中からひろわれて、ある男の子と家族になったんだ。でも、体が大きくなると外につながれて、家族は遊んでくれなくなった…。

飼い主を慕い信じたペットの悲しみ、命の大切さを、家族みんなで考えてください。



## 「捨てないパン屋の挑戦 しあわせのレシピ」

井出 留美/著  
(あかね書房)

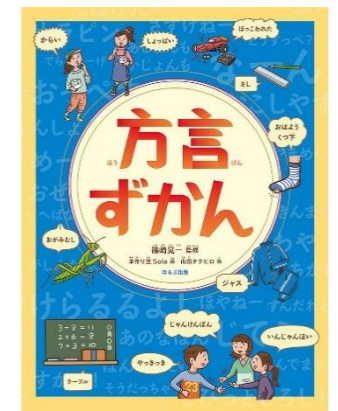
「パン屋なんてなくなればいいのに！」。パンが大嫌いなパン屋の少年田村さん。ところが、大学で環境問題を学ぶうちに、森のいのちをいただいて、パンが作られることに気が付いた。パン職人を目指した田村さんの「しあわせのレシピ」づくりの旅が始まった。



## 「パンデミック・プラネット 感染症が地球にあたる影響」

アンナ・クレイボーン/作 大山 泉/訳  
(評論社)

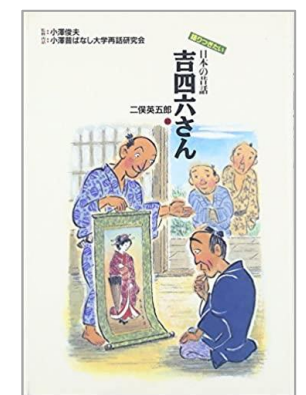
世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルス。3年前に初めて発見されてからまたたく間に世界中に感染、パンデミックとなった。そして、ウイルスはどんどん変化して、いまだに収まらない。これからどうなっていくのだろうか？ 私たちにできることってなんだろう？



## 「方言ずかん」

篠崎 晃一/監修 本作り空 Sola/編  
山田 タクヒロ/絵  
(ほるぷ出版)

日本語は住んでいるところで言葉が違う。あなたがふだん話している「見たばい」や「やぜかー」は長崎弁。意識してみると意外と使っている方言。日本各地の方言を調べてみよう。同じ意味の言葉でも、まったく言い方が違うものや、同じ言葉でも意味が違うものもあるよ。



## 「吉四六さん」

小澤 俊夫/監修  
小澤昔ばなし大学再話研究会/再話  
二俣 英五郎/絵  
(小峰書店)

とんちばなしの「吉四六さん」。思わず笑いだしたり、なるほどと感心したり。自分で読んでももちろん面白いけれど、誰かに読んでもらうともっと面白い。家族で1話ずつ読みあって楽しんでください。